

明野歴史民俗資料館  
第12回企画展

ほくと文化財の家

現在、明野歴史民俗資料館で第12回企画展「ほくと文化財の家」を開催しています。この企画展では、北杜市内の文化財指定されている4軒の家について紹介しています。その他、古民家を見学する時のポイントもご説明しています。

「かやぶんかわら版」50・51号に渡って、企画展の内容をご紹介します。(内海)

◆八代家住宅◆

建物規模【桁行:21.22m 梁間:10.92m】の南面した茅葺き入母屋造りの家

八代家は、江戸時代に上手村(現明野町上手)の名主を代々勤めた家柄。八代家住宅は、棟札より文化5年(1808)の建築と分かる。江戸時代末期の峡北地方の民家構造をよく表している、建築年代がはっきりしている、変更が少なく保存状態が良い、などの理由から、昭和51年に重要文化財に指定された。その後、平成6年に長屋門・隠居屋・文庫蔵・味噌蔵・穀蔵・敷地が追加指定。棟札及び家相図が、重要文化財の附指定となっている。



◆旧平田家住宅◆

建物規模【桁行:19.73m 梁間:9.10m】の東面した茅葺き入母屋造りの家

平田家は、江戸時代を通じて松向本村の仁科家と交代で、松向村名主を勤めた家柄。旧平田家住宅の屋号は「中」といい、元々南北に分家があったためと言われていて、分家ともに東向きであったが、これは古くから金峰山もしくは御岳金桜神社を信仰していたためである。大黒柱が無いという建築様式などにより、建立年代は17世紀後期頃と考えられる。

(平成元年に重要文化財に指定され、小淵沢町松向字杉の木平にあった住宅を、平成3年に小淵沢郷土資料館横に移築した)

古民家見学ポイント

○大黒柱

かつては細い柱が格子状に並び屋根を支えていたが、柱が多いと場所をとるため、省略されるようになっていった。特に土間と板の間の境では柱の省略が進み、1本の柱を四方向からの拵物で受けるようになったため、その柱は他に比べて太くなり、「大黒柱」と呼ばれるようになった。



【旧平田家住宅母屋内部】  
大黒柱登場前の建築なので細い柱が何本も立っている

○棟札

建物の上棟式の時、工事の由緒・年月日・施主・建築工匠などを板に記載して、棟木や棟束に打ちつけたもの。それらは当初、棟木などに直接書かれていたが、その後板に書いて棟木に打ちつけるようになっていった。災難を避けたり、火災鎮めを意味する、呪符や呪文が書かれたりする場合もある。



【八代家住宅棟札】  
八代家住宅の大黒柱上部に取り付けられている

○家相図

住居を新築/改築する際に、屋敷地の形状と家屋の間取り・向き、蔵や納屋などの附属建物との位置関係などから、その家の吉凶を判断するという考え方を家相といい、それが描かれた図面を家相図という。家相図には建物以外に、方位とその吉凶が記されている。



【八代家住宅家相図】